

いのち輝く

「鳥は死ぬまえに悲しい声をあげ、人は死ぬ前に善言を発す」(論語)

広島被爆の七歳の女の子が、同じく被爆の母に抱かれて息を引き取るとき「お母さん、また私を産んでね」とお願いした。ここには生命へのゆるぎない愛と信がある。だから可憐悲愴さを超え聞く者の心をゆさぶり続ける。悪魔原爆もひとの愛と信は奪えない。

日田市の佐藤さんのお姑しゅうとは晩年重くほけられてゆき、入浴も嫁佐藤さんが抱いてある日お風呂の中で抱かれたままお姑さんが「今度産まれてくる時も親と子だといね」と。それからすぐ逝かれる。永遠の生命がここでも輝いている。

嫁は記している。「母の言葉を聞いて私は死にたくなるほど自分がいやになった。母がいなくなればどんなにか楽だろうと考えていたのに」。しかし、嫁は、その瞬間、人間として完全に救われている。ほける、ほけないなど、真実、生命の前には微小なもの。

私たち任運荘の象徴的存在、羽田野モモエ様は百二歳を目前に先日、寝につくような大往生をされた。その数時間前、体をさすっている寮母に前後は聞きとれなかったが、やっと「…忘れません」とつぶやかれた。寮母たち十年のおせわへの言葉であったらう。羽田野さんは生前、一貫して感謝と合掌の人であったから。

枕頭には自分の言葉をかきとめていた。―「生涯で最大の出来事はこの世に生まれできたこと」まさに自主の人。

(一九九三年十一月三十日)